

「 腹腔鏡下大腸手術 アプローチ & スタンダードテクニック」

腹腔鏡下大腸切除研究会 編

久留米大教授・外科学

白 水 和 雄

腹腔鏡下大腸切除術が施行されるようになってから、欧米では11年、本邦では9年の年月が経過し、腹腔鏡下手術は大腸の良性疾患のみならず悪性疾患に対する手術にも欠くことができない低侵襲手術術式として定着してきている。腹腔鏡下手術を行うことにより、術創が小さく、術後の疼痛が少なく、また術後の癒着性イレウスが少ない特徴もある。

腹腔鏡下大腸切除研究会編集の「腹腔鏡下大腸手術—アプローチ & スタンダードテクニック」は、大腸癌に対する腹腔鏡下大腸切除術式の手技を標準化することを目的として、わが国におけるこの領域のエキ

スパートによって共同執筆された単行書である。

大腸癌に対する腹腔鏡下大腸切除術式のこれまでの発展過程と変遷、超音波凝固切開装置など技術面での発展、手術適応の変遷、技術的な問題点、術中術後合併症、トレーニング方法などの「総論」から始まり、「各論」では実際の手術における体位、および手術場のセットアップ、ポート設置部位、さらにはアプローチの方法、すなわち内側アプローチ、外側アプローチ、後腹膜アプローチのそれぞれの利点、欠点が詳細に述べられているだけでなく、さらには病変の部位に分けて腹腔鏡下手術に特

有な解剖学的事項をふまえた手術方法が述べてある。早期大腸癌に対するD1-2郭清術式から低位直腸癌の側方郭清を除いた進行大腸癌に対する主幹動脈根部までのD3郭清術式も、ほぼ確立された術式と考えられる。

大腸癌に対してこれから腹腔鏡下大腸切除を始めようとするビギナーのみならず、専門医への安全で確実な手術を行うためのガイドブックとして薦められる好書である。

● B5 頁118 2002 定価（本体8,000円＋税）

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)